【学位論文要旨】

『宇治拾遺物語』の表現性に関する研究―教材化にむけて―

広島大学大学院教育学研究科教育学習科学専攻教科教育学分野国語文化教育学領域
D一六三八八七　井浪　真吾

一、研究の目的と方法

古典教育（本研究では特に断りのない限り古文領域のことを指す）の意義や目標、方法、教材などについては現在に至るまで幾度となく問われてきた。近年においては、平成一七年度実施の生徒質問紙調査結果において「古典嫌い」「古典離れ」の生徒が目立ち、「愛国心」育成と共にこれの解決も目論んだ現行の学習指導要領において、「言語事項」が「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」へと変更された。その際、各種国語教育誌において、「古典復活！」（『月刊国語教育』二〇〇八年六月）、「伝統的言語文化に親しむ」（『月刊国語教育研究』二〇一〇年八月）などの特集が組まれ、古典教育の意義や生徒の「古典離れ」の解決策などが様々に提示された。それらのほとんどは、古文テキストの表層的な内容読解に終始していたり、各々の古文テキスト観や古典教材観が更新されていなかったりする。古文テキストを学習者にどう分かりやすく、どうおもしろく伝えることができるか、といったことばかりが模索されている。

また、ここ五年間においては、古典文学研究者の側から現在の古典教育、特に古典教材の取り扱いについての提言や異議申し立てが目立つようになってきた。これらに目を向けてみると、古典教育研究からの提言や授業実践報告と同様、「生徒の古典嫌い」をどう打開していくかに議論が集中しており、教科書教材の読み方、教科書に採録されていない古文テキストの紹介、あるいは写本、変体仮名学習など、古典世界へのアプローチに関するものが大半である。ここでも“古典世界の奥深さ”、“古典文学の魅力”など、古文テキストの価値はアプリオリに認められ、これに「親しむこと」を目的としたものが多く、広く「人格の完成」（教育基本法）を目的とする教育の場での学習の意義との回路が明示されない。

このように、古典教育研究者や古典教育実践者、古典文学研究者の提言や報告は、古文テキストや伝統的な言語文化を先験的に価値あるものと認定し、これをどう分かりやすく、どうおもしろく伝えていくかばかりに議論が集中する。そして、それぞれのプロパーから発言や提言が為されるだけで、古典文学研究と古典教育とを架橋する試みは見られない。

こうした古典教育をめぐる情況を踏まえ、次の二点が課題であると考えた。

一点目は、古文テキストや伝統的な言語文化に対する捉え方である。前述したように、古典教育研究者の提言や古典教育実践者の報告、古典文学研究者の提言などにおいて、古文テキストや伝統的な言語文化はアプリオリに価値が認められている。これは現行の学習指導要領や二〇一八年に告示された新学習指導要領解説においても同様で、中等教育で扱われる「言語文化」は「文化的に高い価値」があるとされている。それ故、古文テキストや伝統的な言語文化は教養として伝えられるだけで、それらがどのようなモノやコトなのかについて考えられることがない。つまり、それらは静的なものとしてのみ捉えられ、動的に捉えられることがない。

二点目は、現代的な教育課題を踏まえた古典教育意義論の検討、これと関連した古典教材のあり方についての検討である。これも前述した通り、現行の学習指導要領やこれまでの古典教育論、授業実践報告では、古文テキストは教養として伝えられる。そして、学習者が、伝えられた教養を身につけることで、思考や認識を形成していくことが目指されていた。こうした考え方は、新学習指導要領解説においても顕著である。新学習指導要領解説は、普遍的な教養として古典を学ぶことで、予測困難な社会でよりよく生きる、といった「現代的な教育課題」を解決することを目論むが、これは果たして可能であろうか。抑も古文テキストに「普遍的な教養」など書き込まれておらず、時代ごとに価値を付与されて「古典」（カノン）とされたことはこれまでの研究で明らかにされている通りである。とすれば、新学習指導要領解説に記された「現代的な教育課題」は、「普遍的な教養」を伝えるとは異なる古典学習で解決していかなければならない。

そこで本研究では、『宇治拾遺物語』（以下、『宇治拾遺』）を主たる対象とし、『宇治拾遺』研究の成果を活かしながら『宇治拾遺』の表現性を分析し、それを踏まえた『宇治拾遺』の教材化を図ることで、古典文学研究と古典教育との架橋を試みたい。『宇治拾遺』は中等教育において戦後から教材として採録され、特に高等学校国語科教科書においては、古典入門教材として採録されることが多い。しかし、これまでの『宇治拾遺』研究、特に80年代以降の『宇治拾遺』研究においては、『宇治拾遺』は表層的な読みやすさとは裏腹に、事象や語のモティーフ性、話

型、さらには流通する人物像や逸話を援用しつつそれをずらしたりして説話を語り、批評性に富む複雑な表現性を有した説話集テキストとして語られてきた。つまり、古典教育で語られる教材としての『宇治拾遺』と、説話研究で語られる説話集テキストとしての『宇治拾遺』との間には大きな懸隔が認められるのである。この懸隔を小さくすることで、言い換えれば、『宇治拾遺』を対象に、古典教育研究や古典教育実践が明らかにしてきた古典教育の意義や目標を踏まえて、古典文学研究が明らかにしてきた『宇治拾遺』編述主体の対話の有り様を『宇治拾遺』の教材化に生かしていくことで、現在の古典教育が抱える課題の解決を目指す。

そこで、本研究の研究課題を次のように設定する。

①『宇治拾遺』の表現性とその位相の探究（第一部）
②古文教材、説話教材が置かれている情況把握、古典教育の目標の探究（第二部第一章）
③①、②を踏まえた『宇治拾遺』の教材化案の提示（第二部第二章）

これらの研究課題を達成するために、以下の方法を採る。

（1）『宇治拾遺』の表現性の分析に関する先行研究の整理・検討
80年代以降の『宇治拾遺』の研究では、物語内容のみならず、『宇治拾遺』の表現性が窺われてきた。これらの『宇治拾遺』研究は、『宇治拾遺』の対話過程の具体的個別的な局面を明らかにしてきたという点で、その成果や表現性を分析する際の観点が、『宇治拾遺』の教材化の一助となる。そこでまず、それらの研究を整理・検討することで、『宇治拾遺』の表現性を分析する際の手がかりを得る。

（2）『宇治拾遺』表現性の分析
（1）の整理・検討を基に、『宇治拾遺』の表現性を分析する。その際、先行研究ではあまり為されることのなかった、同時代的な言語場からの『宇治拾遺』の表現性の捉え直しも試みる。

（3）中等教育国語科教科書に採録された説話教材の調査と考察
これまでとは異なる『宇治拾遺』の教材化を構想するにあたって、まずは『宇治拾遺』がどのようなテキストとして、どのように学習者に差し出されてきたのかを確認する。そのため、国語科教科書において、どのような説話集テキストからどのような説話が、どのような教材として採られ、学習者とどう出会わされようとしているのかについて、教材本文やそれに付随する解説、学習の手引きなどを調査し、考察する。

（4）国語教育誌に見られる実践報告の調査と考察
改めて述べるまでもないが、テキストの本文や教科書の教材本文、それに付随する解説や学習の手引きなどが、そのまま教育内容として学習者に差し出されるわけではない。国語科教員は、どのような教育内容のために、どのような古文教材を用いて、学習者にどのようなモノやコトとして古文テキストを差しだそうとしているのかを、古典教育の実践報告や古典教育研究者の提言などを調査し、考察する。

（5）中等教育国語科教科書に採録された『宇治拾遺』教材の調査と考察、『宇治拾遺』に関する古典教育の発言や実践報告の調査
（3）、（4）で行ったことを、『宇治拾遺』についても行う。

（6）益田勝実古典教育論の検討による古典教育の意義や目標の検討
国語教師、国語教育研究者、文学研究者、教科書編集委員などの多彩な相貌をもつ益田勝実の古典教育論を、同時代的の情況との対話過程に注目して捉え直し、教材化を構想する上で必要な古典教育の意義や目標について検討する。
（7）『宇治拾遺』教材化の提案
（1）～（6）を踏まえて、『宇治拾遺』の教材化を図る

二、各章の概要

第一部　『宇治拾遺物語』の表現性とその位相

第一部では、『宇治拾遺』の表現性を分析し、それを同時代的な言語場から捉え直し、『宇治拾遺』の表現性の位相を見定めた。

第一章　説話研究と『宇治拾遺物語』研究の現在

第一章では『宇治拾遺』を取り巻く説話研究の情況や『宇治拾遺』研究の情況をおさえ、『宇治拾遺』の表現性に注目する本研究を、現在の説話研究や『宇治拾遺』研究においてどのように位置づけられるのかを示した。現在の説話研究では、単一の説話集テキストだけを研究対象とするのではなく、諸テキスト、諸領域に目配りしながら、社会的事象・思想的事象・文化的事象を明らかにすることが求められている。また、『宇治拾遺』研究では、80年代以降「先鋭的な作品論」が発表されて以降、『宇治拾遺』はいつまで経っても表現性において極点にある説話集テキストであると認定されている。その中で、本研究は『宇治拾遺』という単一の説話集テキストを対象とすることで、『宇治拾遺』を一つの窓として、更新されてきた中世言語場の風景を観察し、世界認識や世界像構築の全体像を結ぶことが容易ではない『宇治拾遺』において、その一端を示そうとするものであることを述べた。

第二章　先行研究にみる『宇治拾遺物語』の表現性

第二章では、『宇治拾遺』に関する先行研究において、『宇治拾遺』の表現性について、どのようなことが注目され、『宇治拾遺』をめぐってどのようなことが述べられてきたかを整理し、『宇治拾遺』の表現性分析の手法としてまとめた。取り上げたのは「先鋭的な作品論」であった、佐藤晃氏、荒木浩氏、森正人氏、小峯和明氏、竹村信治氏の諸論考である。『宇治拾遺』の章段を分析する際の観点として次のように整理した。

【『宇治拾遺』のテキスト観】

・「宇治拾遺は才ほど読む。読者の才に応じて多彩な風貌を覗かせる」。
・「「読者を眩惑し、はぐらかし、煙にまく、したたかな〈語り〉」と戯笑性」。
・「『宇治拾遺』は、説話の読みにおける享楽性を追求した説話集」。
・「語られる話を一律に秩序づけることとは無縁な精神性」。

【同話・類話との比較】

・ヒト、モノ、コトにおいて違いは見られるのか。
・『宇治拾遺』話にしか見られない表現はどのようなものか。
・同話、類話にしか見られない表現はどのようなものか。
・同じような内容を表していながら、表現がどのように異なっているか。
・同話、類話との文体の一致度はどのようであるか。
・同話、類話はどのように意味づけようとしているか、あるいは意味づけを拒もうとしているのか。また、それは成功しているのか、失敗しているのか。これらを同話、類話の話末評、説話排列、収録された巻、語り方などから探れるのか。

【説話の語られ方】

・説話全体の語られ方はどのようであるか。
・話末評はどのようであるか。また、それは説話内容と齟齬をきたしているのかどうか。
・ヒト、モノ、コトのモティーフ性はどのようであるか。また、事実関係に照らしてどうであるか。
・同話や類話との異なりはどのようなことが起因しているのか。逆に異なりが見られないのはなぜか。
・模倣している話型や文体はあるのか。あれば、それとの異なりはどのようなところに見られるのか。
・言語遊戯はあるのか。あれば、それはどのようなことを実現しているのか。

【説話排列、説話の位置】

・説話排列はどのようであるか。また、それらによるどのような「連想・対比・転換」が起こり、各章段にどのような読み替えが起こるのか、あるいは起こらないのか。
・『宇治拾遺』内に類似する説話内容や類似する表現をもつ章段はあるのか。あれば、それらとどのような「連想・対比・転換」が起こり、各章段にどのような読み替えが起こるのか、あるいは起こらないのか。

【各章段の言述】

【同話・類話との比較】、【説話の語られ方】、【説話排列、説話の位置】で確認してきたことを通して、どのような問題領域をめぐって、どのような言説と対話し、どのように応答しようとしているのか。

第三章　『宇治拾遺物語』の表現性の実際

第三章では、第二章での整理をもとに、第16段、第17段、第30段、第61段、第63段を取り上げ、『宇治拾遺』の表現性の一端を示した。その中で、『宇治拾遺』編述主体は、自身を取り巻く他者の言葉に潜む欲望やその権力性に敏感で、それに懐疑的な眼差しを向ける主体であること、人物や出来事に関する知を用いながら説話を語っていること、語りを批評する位相にあること、編述主体を取り巻く問題群を問い直し、流通する言説とは異なる応答を試みていることなどを示した。

第四章　『宇治拾遺物語』と言語場

第四章では、第二章、第三章で確認した『宇治拾遺』の表現性を同時代的な言語場から捉え直した。言語場に存在する多元的な〈場〉のうち、文学場と仏教場を取り上げた。

文学場では、御子左派と反御子左派との対立、その中でも特に両派の代表的な人物である藤原為家と真観（藤原光俊）との対立を取り上げた。為家の表現志向は「古き」「詞」、先行歌の「心」（本意）を重視し、和歌伝統を主体化してそれの再生産に向かうというもの。一方の真観のそれは定家流の「幽玄」を継承しつつ、新たな材や〈知〉を持ちこんで「心」を見つめ直し、「幽玄」の深化と更新を図るというもの。そして『宇治拾遺』は問題領域をひらき、それを語りの現在において流通する言説とは異なる形で改めて問い直そうとしており、「幽玄」や「心」をその現在において問い直す真観の表現志向との相同性を認めることができた。

仏教場では、顕密寺社と法然との対立に注目した。顕密寺社の僧たちは言説の権力性などに熟知しており、戦略的に民衆の生を搦めとっていく。一方、こうした仏教言説の権力性や僧の言説戦略について熟知していた法然は、別の仏教言説を持ちこんだり読み替えた仏教言説を持ちこんだりし、顕密寺社が戦略的に用いる仏教言説を無化しながら、彼らの生きる現在において〈仏教〉の問い直しを図っていく。ここに問題領域をひらいていく『宇治拾遺』編述主体との相同性を認めることができた。

第二部　『宇治拾遺物語』の教材化

第二部では、第一部をもとに『宇治拾遺』の教材化を図った。

第一章　古典教育の目標と古典教材

第一章では古典教育の現在の情況を把握、益田勝実の古典教育論から古典の「教育内容」について検討した。

まず、中等教育の現場で用いられている国語科教科書の中の古典教材の現状を、説話教材を中心として把握した。説話教材は入門教材として扱われる。しかし、こうした捉え方は、教材観が更新されずいつまでも説話（集）＝民衆の文学として捉えられてしまっていること、そして文学研究ではすでにそうした捉え方は否定されていること、説話が説話集テキストの中の説話として読まれることがなく、言語主体の「世界解釈、世界像構築」には目が向けられることがないということ、それ故、テキストの教材としての可能性が縮減してしまうことなどの問題を指摘した。

次に、古文テキストがどのように学習者に差し出されようとしているのかを、二〇〇八年～二〇一三年の各種国語教育誌において発表された実践報告や論考から探った。古典をカノンとして捉える論考や実践報告では、「美しい響きやリズム」、「日本民族の核心」、「現代に通じる普遍的な考え方」を有するテキストとして古文テキストが学習者に差し出されようとしていた。また、古典を関係概念として捉える論考や実践報告では、「表現例」、「身近なテキスト」、「〈他者〉」として学習者に差し出されようとしていた。このように整理した結果、古典教育に関する実践報告や論考においては、「ナショナリズムへの接続の容易さ」、「日本文化の多元性」、「古典テキストの読みの深度」、「〈知〉の停滞」などに目配りが為されていないことを指摘した。

後半部では益田勝実の古典教育論を、50年代と60年代とに分けて検討した。50年代においては、公共性構築を担う主体の育成を図る古典教育を、60年代においては、誰もが公共性にアクセスできるように、学習者の言説の資源獲得を図る古典教育を構想していたことを指摘した。

第二章　『宇治拾遺物語』教材化の構想

第二章では、これまでの議論を踏まえて、『宇治拾遺』の教材化案を提示した。

まず、『宇治拾遺』がこれまでどのようなテキストとして差し出されようとしていたのか、或いは『宇治拾遺』を用いてどのようなことが教えられようとしていたのかを、中等教育現場の国語科教科書や、実践報告、提言などから探った。第二部第一章第一節で確認したことと同様のが窺えた。

次に、齋藤純一氏らの公共性論やM・バフチンの言語論などを援用し、古典学習の空間を公共的な空間にすることの必要性を述べた。そしてそれ故、テキストは何について、どのような他者の言葉と対話し、どのような応答（意見）を述べているのか、こうしたことを聴き取れるようにテキストを学習者に差し出さなければならないことを指摘した。

第三節ではこれまでのことをもとに第104段の教材化案を提示した。

四、研究の展望

本研究は、古典文学研究と古典教育との架橋を目指して、『宇治拾遺』の教材化を図った。教材化にはテキスト、教育内容、学習者が関係するが、前者二つをもとに構想したものである。テキストとしては対話を拓くテキストを用い、教育内容としては公共性に立つことのできる主体の育成をねらった。

今後は、こうした試みを中等教育現場で実践し、本研究の修正を図りながら、中等教育現場の国語科教員のヒントになる提案をしていく必要がある。その際、教育方法論や評価論の成果を踏まえながら、提案をしていくことが必要であろう。加えて、益田が言及しているテキストの差し出し方についても、有効か否かを検討していく必要がある。

また、本研究は現代の古典学習が直面している「古典嫌い」の問題や、言語的な障害の克服などについては言及できていない。これらについても国語学や心理学の知見などを取り入れながら実践を繰り返すことで、提案をしていく必要がある。

最後に、『宇治拾遺』の表現性分析に関しては、近年の説話研究を十分に生かせていない。第一部でも述べたように、説話集テキストを対象とし、言語場から表現性を捉え直すことは今なお有効である。近年の説話研究が明らかにしてきた、また他のジャンルの研究が明らかにしてきた成果を生かすことで、中世言語場に迫り、『宇治拾遺』の表現性を捉え直すことで、新たな『宇治拾遺』像を示すことができると思われる。

こうした点で、本研究は古典文学研究と古典教育との架橋の途上にある。実践、提案を繰り返すことで、本研究を補完していく必要がある。これを今後の課題としたい。